

わが人生の転機

心に残る

ひと言・人・作品

リレートーク①

人は誰も、人生の転機に大切な「出会い」を経験する。岐路における出会いは、恩師、人、家族の激励や叱咤、心に響く言葉であり、本など芸術作品から受けた感動もある。人生に大きな影響を与える出会いは、大きな決断を強いられるトップにとっては、時に価値観を形づくり、方針選択の判断基準となる。各分野のトップの特別な出会いは悩める人々の心に光を当てられる可能性もある。そんな思いから「わが人生の転機」を原則リレートークで連載することにした。第1回は東海学園大学の石川清学長に人生の転機での「羅針盤」を聞いた。

ひたむきな兄の姿に感動、医学の道へ。 羅針盤は「人生のやりがい」

石川氏は1947年名古屋市生まれ。名古屋大学工学部航空学科卒業、大学院に進むも、71年に中退して同大医学部入学。集中治療を希望し名古屋市立大学麻酔科入局。カナダ・トロント大学留学を経て、名市大助教授。94年名古屋第二赤十字病院へ移動。同院集中治療部長、副院長などを歴任。2007年院長就任。18年院長定年退職後、身を教育界に転じ、19年愛知医療学院短期大学学長、23年から現職を務める。

航空工学、医学を学び、医師として活躍した後、教育機関のトップに。3つの転機を経験した異色とも思える半生にどんな出会い、強烈な人生体験があったのだろう。石川氏は「人生のやりがいを求めた結果に過ぎない」と淡々と話す。

石川氏は男3人、女1人の4人兄弟の末っ子。実家は両親が名古屋市内で営む薬局。9歳上の長兄は金沢大学医学部を出て医師に、次兄は家を継ぐため名市大薬学部を経て薬剤師に。3男の石川氏の人生は長兄の影響が強く、長兄から幾つかの「人生のやりがい」を学んでいる。

「ラグビーをやっていた長兄の影響で高校時代からラグビーを始め、大学・社会人合わせて26年間現役でした。プレーの面白さだけでなく、ラグビー精神、自己犠牲の精神などラグビーの魅力に取りつかれました。人間はやりがいがあれば、大変なことや嫌なことも耐えられるこ



とをラグビーから学び、人生のやりがいを真剣に考えるようになりました」

医師になったのも、自分の信念を貫いてひたむきに努力する長兄への憧れがあったためという。

「最初医学部に行かなかったのは、名大病院に見舞いに行った時、玄関に入ると薄暗く、ホルマリンの匂いがして、こんな陰気臭いところで働きたくないという単純な理由でした。もっと明るい感じの航空科へ。しかし、大学院1年の就職活動中、大企業の菌車の一つになることがやりがいのある仕事とは思えませんでした。その頃、医者になった長兄がやりがいを持って働いている姿を見て感動し、医学部へ入り直す決意をしました」

「長兄は元来、無口で人付き合いが下手な変わり者でした。小児科医となり、最初、教授か

ら命ぜられた勤務先は、誰も行きたがらない重度心身障害児施設医王園（現・国立病院機構医王病院）でした。長兄は不服も言わず、その後一生その施設に勤めることに。障害児を心から愛し、障害児を寝かせておくより外で運動させた方がいいとの信念で、周りから医者らしくないからやめろと言われても、やりがいを持って働いていました。兄はクリスチャンで「障害児に仕えることが僕の伝道だ」と話し、障害児のために自らも身体を鍛え、毎日の通勤は自転車でした。しかし、07年、通勤途中に倒れて69歳で急逝。障害児のために人生を捧げた兄の葬儀には、障害児やその家族約600人が別れを惜しんだ。そんな長兄は私が最も尊敬する一人です」



石川氏の兄（石川氏提供）

石川氏は医師になり、集中治療がやりたくて麻酔科を専攻。生きるか死ぬかという患者を救命し、患者や家族からの感謝の言葉に大きなやりがいを感じた。カナダ留学後、集中治療では日本のトップレベルだった名市大の助教授として学会や研究活動に従事し、それなりのやりがいは感じたものの、兄のような本来の人生のやりがいではないと判断。より患者に関わりたくて赤十字病院に異動した。そこでは赤十字の使命である災害医療にも関わり、阪神淡路大震災での救援活動で被災者から涙を流して感謝された経験は大きなやりがいに。その後、スーダン紛争、スマトラ島沖地震・津波、イラン南東部地震、東日本大震災などの救援活動に関わり、「苛酷な状況で自分を支えたのは人生のやりがいであり、それこそが人を輝かせることを実感しました」と話す。院長としては職員のやりが

石川 清（いしかわ きよし）1947年、名古屋市生まれ。70年名古屋大学工学部航空科卒・大学院入学、77年名古屋大学医学部卒。78年名古屋市立大学医学部麻酔科助手。86年カナダトロント大学麻酔科留学。89年同大大学病院集中治療部 助教授。2001年名古屋第二赤十字病院 副院長・救命救急センター長。07年名古屋第二赤十字病院 院長就任。17年から愛知県テニス協会会長・東海テニス協会会長。18年名古屋第二赤十字 名誉院長就任。19年愛知医療学院短期大学 学長就任。21年瑞宝中綬章受賞。23年4月から東海学園大学 学長就任。

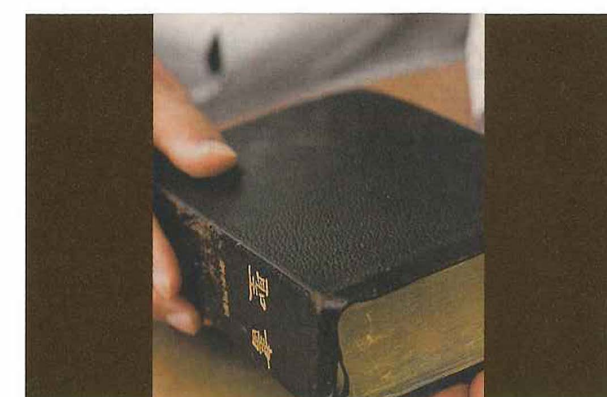
リレートークのバトンは石川学長からサガミホールディングスの鎌田敏行顧問（元社長・元会長）に手渡された。連載の第2回は鎌田氏のグローバルな視野の原点を紹介する。（中原 道文）

いを見出すことに尽力。11年間にわたる院長時代は、最高の病院を目指して導入した全病院的なコーチングによる組織改革に最もやりがいを持って取り組んだ。

18年定年退職を迎えるに当たって、まず考えたのも次のやりがいのある仕事だった。そんな時、誘われたのが愛知医療学院短期大学学長の話だった。同大学はリハビリの大学でクリニック・デイケアセンターとこども園を併設していた。高齢化が進む中、リハビリの人財育成は不可欠であり、加えて、3つの組織が三位一体となって、学生、子ども、お年寄りの3世代が交流し「地域のお年寄りを元気にする」というビジョンは、やりがいのある仕事と思い、学長を引き受けた。しかし、5年間の学長在任中、コロナ禍での3年間があり、ビジョンを達成できず、人生のやりがいを見出せなかったという。

現在学長を務める東海学園大学では、24年度、文化人類学者で東京工業大学副学長だった上田紀行氏を特命副学長に迎え、大学の教育改革を進める中で、石川学長は三たび「人生のやりがい」を見出そうと常に前向きに向き合っている。

半生で3回の大転身を遂げた石川氏。人生の節目節目でやりがいを意識して乗り切ってきた。長兄から学んだ「人生のやりがい」こそが意味のある人生に繋がり、人生の糧となった、との強い思いが伝わる。



兄の形見の聖書（石川氏提供）